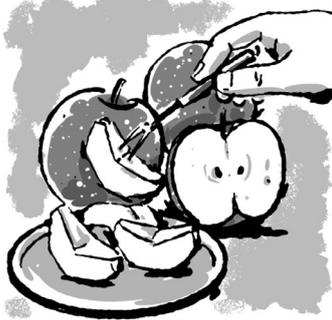


人は一人では生きていきません。多くの人に支えられ、物に恵まれ、自然と共生しています。そうした生活環境は絶妙な関係性の中にありますが、そのバランスを崩してしまふと、生活基盤が揺らぎ、結果として様々な面に支障をきたしかねません。環境倫理学の父と呼ばれるアメリカの生態学者のアルド・レオポルド氏は、自身の体験から「土地倫理」を提唱しました。

土地倫理とは、共同体という概念の枠を、土壌、水、植物、動物を総称する「土地」にまで拡大した場合の倫理を指します。要するに、人間は自然の支配者や管理者ではなく、共に生きている一構成員であることの自覚が重要であるということです。

レオポルド氏は元々、森林官をしており、その務めは害獣駆除でした。具体的には、娯楽であった狩猟の対象となる鳥獣を保護するために狼などを撃ち殺していたのです。その日も森を見回っていると、親子連れの狼を見つけました。当時、狼を撃つことが務めであると疑わなかったレオポルド氏は、その親子に銃口を向けます。まずは子供の狼を撃つと、弾は命中し、その場に倒れました。次に母親を撃つと、撃たれた母親はそのままふらふらと歩き続け、子供に覆いかぶさるように倒れ、絶命したのです。その様子を目の当たりにしたレオポルド氏は、それまで信じてやまなかった森林官としての正義に疑問を抱くようになりまし。それから環境について研究を深めていくと、その疑問が間違いではなかったとの

## 共同体の重要性を知り 恩返しの生活を送ろう



確信を深めます。

当時アメリカでは、狼を狩ることににより、一時的に鹿が増えました。ところが、鹿は草を食べるため、鹿が増えたことで山が枯れ、結果として鹿も生きていけない状態になってしまったのです。

その事実を知ったレオポルド氏は、共同体の概念を「土地」に拡張し、思考し行動しなければ、持続可能な生活は得られないと考えました。

▼ 「共同体」を良好に保つことを行動原理とする重要性は、自然界だけの話ではなく、日常生活にも言えるのではないのでしょうか。人は、家庭や職場、地域や国、地球など、様々な共同体の一員です。それだけに共同体が悪化すれば、当然その悪影響を自分も受けることとなります。ゆえに何かを向上させたいと思う時は、個ではなく周囲全体を良くすることを考えたいものです。

倫理運動の創始者・丸山敏雄は、『万人幸福の葉』の中で「大衆の重畳堆積幾百千乗の恩の中に生きているのが私である」と、多くの支えの中で自分の命があることを記し、その恩の自覚が大切だと説きました。そしてその中でも、命の根元である親を大切にすることが重要だと述べています。

人は自分の力だけで生きていくのではなく、共同体の中で生かされているという自覚が大切です。そしてその恩を、周囲を良くすることでお返しする生活は、自他の未来を良いものにしていくことでしょう。